

## 生き抜く力を育む人間教育

－小学校における教科指導と現代的課題に着目して－

### Teaching “the will-to-survive” in Humanistic Education:

Arriving to a conclusion on current challenges and heuristic  
education based on a subject at elementary school level

善野 八千子

金山昂資\*・重安勝星\*・内藤翔一\*

早坂虹穂\*・松田彩加\*

#### 要旨：

未来を築く子供たちに生き抜く力を育む人間教育をめざして、「特別の教科道徳」における「夢や希望を育む」指導と「算数科」を軸にした「学力不振による不登校の未然防止」の指導を検討した。具体的に指導案例を提示することで、改善の方向性を示した。特別の教科道徳の中で、自己の生き方を考える時間の保障をすることや算数科指導の中に、生徒指導の3機能を生かした指導の改善などの視点を明確にした。

キーワード：教科横断的指導、特別の教科道徳、算数科、自己の生き方

#### I. はじめに

小学校教育に関わる者は、子供に生き抜く力を育む使命がある。少子化という現実を我が国の人口構造の推移（図1）から確認すると、今後も生

---

\*奈良学園大学人間教育学部4年生（執筆当時）

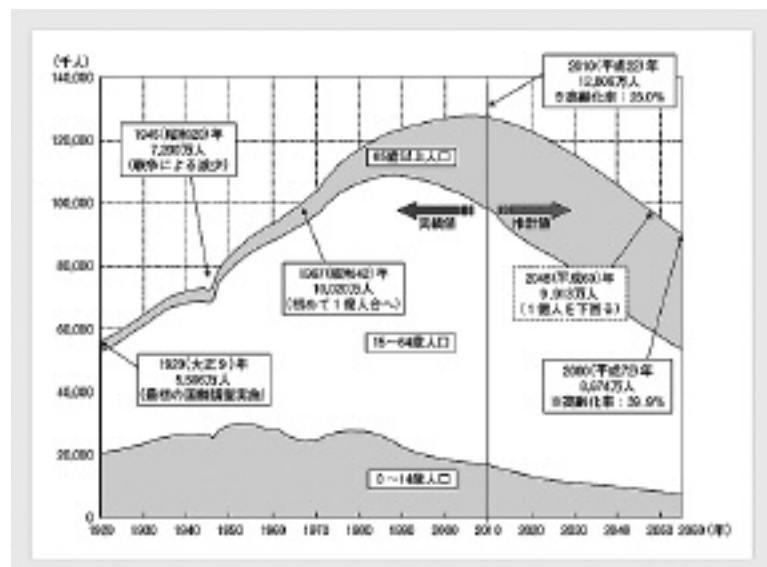


図1 我が国の人口構造の推移

産年齢人口は 確実に減少傾向にあることが分かる。このように生産年齢人口が減少している中で、子供達には、高年齢層も支えていく体力や知力が必要になるのである。今後、未来を担う子供達に対して、自立しこの国を支えて生き抜くために一層質の高い教育が求められている。

筆者らは、2018年に小学校の教師になることをめざして学んだり、指導したりしている途上である。刻々と変化する社会の中で未来に生きる子供に「何をどのようにして力をつけることができるのか」を問い続け、学び続けなければならないと考えている。

ここで、現代の子供の実態について、一例を挙げてみよう。表1は、2017年

表1 大阪府内A小学校が調査した4年生男子の将来の夢  
2016年3月22日 毎日新聞朝刊

将来の夢(小4男子)	
第1位	サッカー選手
第2位	医者
第3位	ユーチューバー
第4位	公務員

大阪府内A小学校が調査した「4年生男子の将来の夢」である。1位サッカー選手、2位医者、4位公務員の中で、注目すべきは、第3位に「ユーチューバー」が入っていることである。自分らしく楽しいことをしながら収入を得るとい新時代のビジネスに、小学生も注目していることが分かる。筆者らの小学生時代には全くなかった職業である。社会の変化に敏感な子どもたちは、「将来の夢への意識」も大きく変化しているのだと考えさせられる。

今回の新学習指導要領は「教科等を越えて、各学校段階や初等中等教育全体で育成することを目指す資質・能力の在り方に関する議論と往還させながら進められてきた」<sup>(1)</sup>とされている。本稿では、未来を築く子供たちに生き抜く力を育む人間教育をめざして、「特別の教科道徳」と「算数科」を軸に、現代的課題に着目して、指導の改善について検討していきたい。

## II. 「特別の教科 道徳」と「自己の生き方について考える力」

文部科学省ホームページでは、「現在の日本の子供たちは、諸外国と比べて自尊心が低く、将来の夢を描けないという指摘がある。」<sup>(2)</sup>とされている。それに加え、現在の子供たちは基本的な生活習慣の乱れや、規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下なども小学校教育実習などを通して実感した。

筆者らは、子供たちが成人して社会に参画する時代を見据えて、子供の道徳性をはぐくむため、子供を大切に、自ら何ができるかを考えて道徳教育を実践することが必要であると考えます。

そこで、本節では道徳教育の実践的事例をもとにして、『子供たちが「自分の将来に向かって、夢や希望をもち、くじけず前進していく」意欲をもつことができるようになる。』ことが達成できる指導案の作成を目標とする。このため、2つの指導案を取り上げ、比較・分析し、新たな指導案を検討していく。

## 1. 「特別の教科 道徳」と現代的課題の設定

「豊かな人間力」とは、自立した個人としてたくましく社会を生き抜いて行くための総合的な力である。具体的には、知・徳・体の調和があり、「社会を構成する『個』」と「自己を確立する『個』」の両方を兼ね備え、社会の中の一人の人間として調和的に生き抜く力である。また「豊かな人間性」とは人を思いやる心や誠実性など、その人のもつ調和のとれた人間らしさが豊かであるということである。

本研究のテーマ「生き抜く力」を育む人間教育において、「特別の教科 道徳」を取り上げる意図は、次のように整理される。

道徳教育とは、道徳の時間を要として、学校の教育活動全体を通じて行うものである。加えて、子供が、生命を大切にすると心や他人を思いやる心、善悪の判断などの規範意識の道徳性を身に付けるために、極めて重要な教育であることは、言うまでもない。

道徳教育は、平成30年度から「特別の教科 道徳」（道徳科）に改正されることとなった。

『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』（2017）では、「学校における道徳教育は、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする教育活動」<sup>(3)</sup>であると述べられている。

また、一方、「特別の教科 道徳」の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」とされている。これらのことから、「自己の生き方について考える」という部分が共通していると言える。

前述のように、道徳教育、特別の教科 道徳の目標で共通している「自己の生き方について考える」ということは、自分自身の将来について考える

ということに合致すると考える。教育課程の中で、自分自身と向き合い、自己の生き方について考え、将来に希望をもつことができるような指導を考えていきたい。

そこで、本稿では、「自己の生き方について考える」に焦点を当てて、指導案の検討をしていく。

## 2. 「特別の教科 道徳」実践事例及び選択の理由

先述のように「子供たちが「自分の将来に向かって、夢や希望をもち、くじけず前進していく」という意欲をもつことができるようになる。」ことが達成される指導案を検討するために、実践的事例として以下の2つの指導案（A案、B案）を取り上げる。

### 【A案 第5学年道徳学習指導案】

主題名：「目標に向かって生きる」、内容項目1-(2)

ねらい：夢をかなえた人の背景にはかかれた努力があったということを知った主人公の心の変容を考えるを通して、より高い目標を設定してそれに向かって努力していくことが大切であることに気づかせ、今なすべきことを懸命に頑張ろうとする心情を育てる。

### 【B案 第6学年道徳学習指導案】

主題名：「目標に向かって」、内容項目1-(2)

ねらい：より高い目標に向かって、障害や困難に打ち勝ち、粘り強くやり通そうとする心情を養う。

これら2つの指導案を実践的事例に選んだ理由は次の通りである。まず、3点の共通点である。

- ①小学校高学年が対象である点
- ②内容項目が1-(2)である点
- ③指導過程（本時の展開）で資料を扱っている点

上記の3点に加えて、主題設定の理由についても、A案は、「…（略）

…自信を失ったりくじけたり、挫折を味わったりすることもあるが、希望と勇気を失わず、絶えず自分と向き合いながら打ち勝っていく強い心を育てなければならない。人生をより豊かに実りあるものにしていくため、夢や希望、理想に向かって着実に前進していこうとする心を育てることは不可欠であると考え、本主題を設定した。」としている。

B案では「…(略)…身近な生活の中で自分の現状に合った目標を持つことの良さや、その目標に向かって着実に前進していこうとする強い意志と実行力の大切さに気づかせ、目の前の失敗や壁に左右されることなく、それを乗り越えていこうとする積極的な心情を育てたい。」としている。この主題設定の理由は、「つけたい力」の目標に合致したものである。以上の理由から、この2つの指導案を取り上げることにした。

### 3. 「特別の教科 道徳」指導案の比較・分析

次に、2つの指導案の展開に注目し、整理してみた。

#### 【A案の展開】

①資料にかかわる体験を引き出す。→②資料を読んで話し合う。→③生活を振り返る。→④ゲストティーチャーの話聞く。

#### 【B案の展開】

①自分の目標を発表し、資料に関心をもつ。→②資料を読んで「ぼく」の気持ちを考える。→③学習を振り返るとともに自分の生活を振り返る。

いずれも資料を読み、登場人物の気持ちになって考えるという流れである。この展開では、子供たちは自分の生き方や自分の将来について自分事として考えることができているのではないだろうか。つまり、登場人物の心情理解のみの指導になってしまっているのではないかと筆者らは考える。2つの指導案には「自分の生活を振り返る」という活動時間が設定されているが、生活を振り返るだけでは、より高い目標に向かって努力したり、粘り強くやり通そうとしたりする心情を育てることは困難であろう。

「これからはもっと努力していこう。」「逃げ出したくなかったことがあるが、あきらめず頑張っていこう。」など、自分について考える時間を十分に保障することが必要なのではないかと考える。

### 4. 「特別の教科 道徳」と「自己の生き方について考える力」についての考察

A案、B案の2つの指導案の比較・分析から指導案改善の方向性が見えてきた。今後の指導案改善の視点を2点あげておく。

#### （1）本時の中で、「自分自身について十分に考える時間」を設定する。

登場人物の心情理解のみの指導に終わることなく、子供たちが自分事としてこれからの生き方や、自分の将来の夢について考えたり、伝え合ったりして対話を深める時間を保障する指導が肝要である。

#### （2）「自己の生き方について考える」ということを核とする。

自分の生活を振り返るのみに終わるのではなく、これから先の自分について考える活動を展開の中に組み込む。

残された課題は、実践的研究の不十分さである。実際に、道徳の授業実践を小学校第4学年（平成28年 奈良県内公立小学校）において、試みたものである。教材は、「あしたもともだち」作：内田麟太郎、展開では「自分自身の言葉に置き換え考える」活動を組み込み、「相手を大切にする」場面で、「自分ならどのような言葉を使うかを考える」活動である。

実践を通して明らかになったことは、2点ある。1点目は、「温かい言葉」をワークシートに書く活動は、全児童に見られたことである。しかし、2点目は、言葉の量は個人によって大きく異なり、「温かい心」が育っていると評価する指標の検討が大きな課題となったことである。

### Ⅲ. 「算数科」と「自己の生き方について考える力」

「自己の生き方について考える力」は、マズローの欲求5段階説（図2）

によると「自己実現欲求（自分の能力を引き出し創造的活動がしたいなど）」に分類される。これはピラミッドの高階層に属する欲求であり、マズローは低階層の欲求が満たされると、より高次の階層の欲求を欲する、としている。

ここでは「自己の生き方について考える力」を引き出し伸ば

すために、低階層の欲求である「社会的欲求（集団に属したり、仲間が欲しくなるなど）」に関連する現代的課題である不登校問題から考えてみたい。



図2 マズローの欲求5段階説

### 1. 教科と現代的課題の設定

不登校とは、「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童・生徒が登校しない、あるいはしたくともできない状況にある者（ただし、「病気」や「経済的な理由」による者を除く。）」<sup>(4)</sup>を指す。平成27年度の文部科学省の調査では、不登校児童の数が27,581人/6,543,104人であることがわかった。このことにより、平成3年度から25年続けられてきた調査の中で不登校児童の割合が過去最高を更新した。

これは、単純に計算しても240人に1人は不登校児童がいることとなる。つまり、1校あたりの在籍児童数の全国平均が300人程度ということから、1校に最低でも1人は不登校児童がいることとなり、この数値からも、不登校児童の問題が憂慮される事態となっていることがわかる。

文部科学省（2009）では「児童生徒が不登校とならない、魅力あるよりよい学校づくりのための一般的取組」の一つとして、「新学習指導要領の

下、創意工夫に満ちた教育課程を編成し、各教科、道徳、特別活動はもとより、新設された『総合的な学習の時間』も有効に活用し、自己理解を深め、自己選択能力の育成を目指すとともに、社会性の育成や人間関係づくりを目指した様々な取組を一層積極的に展開することが望まれること。」<sup>(5)</sup>と掲げられている。つまり学校教育全体を通じて、不登校未然防止ができる学校づくりをすることが期待されているといえる。

文部科学省（2015）の調査によると、不登校の要因の理由として上げられた項目のうち「学校に係る状況」に分類されるものの中で、「いじめを除く友人関係をめぐる関係（20.5%）」に次いで、「学業の不振（14.0%）」を選んだ児童が2番目に多い結果となった。このことから、学校の授業についていけずに不登校になった児童が多数いることがわかる。

さらに、「現代の子どもの成長と徳育をめぐる現代的課題」として日本の若者・子どもたちが、諸外国と比べて「自尊感情」が低いことも指摘されている。平成28年度実施の文部科学省の調査<sup>(6)</sup>では、「日本の子供たちの自己肯定感（自分に対する肯定的な意識）は諸外国に比べ低い状況である。」という調査結果がある。さらに学年別の自己肯定感の調査に対し、肯定的に回答したのが4学年（61.4%）、5学年（57.3%）、6学年（54.9%）と学年があがるほど、肯定的な回答が減少しているように、子どもたちの自尊感情も低下傾向にあることが分かる。これらのことから、日本の子ども自尊感情は、①他の国に比べて著しく低いこと、②小学校中学年から下がり始めその後低下し続ける、ことが明らかとなった。

### 2. 算数科及び現代的課題選択の理由

まず、算数科に焦点をあてた理由として、洲脇（2000）や宮地（2000）<sup>(7)</sup>らが「児童・生徒の『算数・数学嫌い』や『理科嫌い』が大きな社会問題となっている。特に小学校では『算数嫌いが学級崩壊の原因』とまで言われており、その真偽は別にしても、算数・数学嫌いが学校教育における問



題行動の一因になっていることは確かである。」と、主張しているように、算数嫌いから起こる学業の不振が不登校につながるのではないかと筆者らは考えたからである。

また、現代的課題選択の理由としては、現在、学校現場で問題となっているいじめ・不登校・問題行動・学ぶ意欲の低下なども、先に述べた自尊感情の低さが原因であるという指摘がある。特に、不登校に関しては、不登校の要因の理由項目のうち「学校に係る状況」に分類されるものの中で、「いじめを除く友人関係をめぐる関係（20.5%）」が最も高い。

古荘によると、「自尊感情が高すぎるというのも、対人トラブルが増える可能性がある」「集団の中の一人として考えると、やみくもに高く保つ、あるいは高めることを目標にすると、收拾がつかなくなる」<sup>(8)</sup>という。つまり、自尊感情が低すぎるだけでなく、高すぎることで対人トラブルが発生し、不登校を引き起こす要因になるというのである。

そこで本節では、不登校を未然に防止する手立てとして、「学業の不振」を解消し、学ぶ楽しさを実感させる算数科指導案の改善を検討する。

### 3. 算数科指導案の比較・分析

不登校未然防止を行うために必要なことは、「教師が授業内容の充実や指導方法の工夫改善について不断の努力を行うこと」であると中馬（2015）や霧川（2015）<sup>(9)</sup>らは主張し、そうすることにより「児童生徒がわかる喜び、学ぶ楽しみ等『学びの楽しさ』を実感し、自尊感情、自己有用感や安心感等による『居場所感』を持ち、他者意識や連帯感を高めていく」ことができると述べている。

その「学びの楽しさ」を実感させるための手立てとして、文部科学省（2010）は次のように示している。「一人一人の児童生徒にとって『わかる授業』の成立や、一人一人の児童生徒を生かした意欲的な学習の成立に向けた創意工夫ある学習指導が、一層必要性を増していると言えます。そして、そ

のための指導に際しては、先にも述べた①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助することの三つの視点に留意することが考えられます。具体的には、一人一人の児童生徒のよさや興味関心を生かした指導や、児童生徒が互いの考えを交流し、互いのよさに学び合う場を工夫した指導、一人一人の児童生徒が主体的に学ぶことができるよう課題の設定や学び方について自ら選択する場を工夫した指導など、様々な工夫をすることが考えられます」<sup>(10)</sup>。

さらに、東京都教職員研修センターと慶應義塾大学との共同研究の結果<sup>(11)</sup>によると、子どもたちの自尊感情を高めるためには、①自己評価・自己受容「自分のよさを実感し、自分を肯定的に認められることができるようにする」、②関係の中での自己「多様な人との関わりを通して、自分が周りの人に役立っていることや周りの人の存在の大きさに気付くようにする」、③自己主張・自己決定「今の自分を受け止め、自分の可能性について気付くようにする」の3つの観点が自尊感情を高めるポイントだと分類されている。これら3点は生徒指導の3機能と関連している部分が大きい。

### 4. 指導案改善の検討

#### （1）単元計画第の改善

C小学校での「円の面積」の授業実践（筆者の内、内藤による）では、生徒指導の3機能を上手く児童に働きかけることができず、発表や発言を躊躇う児童が多かった。そのため授業実践後の課題をもとに単元指導計画を改善した。

改善の視点は、次に示す生徒指導の3機能である。

#### ①自己存在感、②共感的人間関係、③自己決定の場

これらを活用した「生徒指導の3機能を生かした算数の単元指導計画」

表2 6 学年算数学習指導案、単元指導計画（全4時間）

時数	既習知識をもした指導案		改善指導案	
	活動内容	手立て	活動内容	手立て
1	図形の面積の大きさを比べる活動を通して、既習の図形の面積の求め方を振り返る。	未知の円の面積の求め方を多量にさせる	既習の図形の面積の求め方を振り返り、円の面積の求め方を考え、ノートに整理させる。	自己決断の場面として、あらかじめ課題解決の方法をいくつか用意し、児童に選択させる。
2	正多角形と円周角の性質、方眼の数を数えたりして、半径 10mm の円のおよその面積を求める。	半径で求める円の面積はおおよそのものであり、正確な円の面積を求めるためにはどうすればよいかを考えさせ、材料につなげる。	課題解決の方法を同じ思考でグループをつくらせ、半径 10mm の円のおよその面積を求める。	個人グループの考えに「尊重」「承認」「タイムキーパー」「記録係」の役割を担え、児童に自己存在感を思える。
3	円の方眼・台紙の操作から、円の面積の求め方の公式を導き立てて考え、公式を導き出す。	円を長方形に等積変形して、既習の長方形の面積を求める方法から公式をつくり出せることに気づかせる。	グループごとに円の面積の求め方の考えを発表する。それに対して評語カードを用いて相互評価をする。	相互評価は工夫しているところを褒め、話し合うなどの取り組みで、児童の主体的人間関係を構築する。
4	円の面積を求める公式を使って、半径の異なる円の面積を比べたり、円を台紙の方眼の面積を求めるたりする。	円の長さを求める公式と円の面積を求める公式が関連しないように注意させる。	円の面積の求め方の公式を導き立てて考え、公式を導き出す。それを使って半径の異なる円の面積などを求める。	円を長方形に等積変形して、既習の長方形の面積を求める方法から公式をつくり出せることに気づかせる。

を作成した。

以下（表2）に、改善前と改善後の単元計画を示した。網掛をした部分は、改善前後で内容を変更した部分である。これらの内容は全て、生徒指導の3機能である①自己存在感（二重線）、②共感的人間関係（波線）、③自己決定の場（一重線）、を意識したものである。

（2）展開の流れ

【第1時】導入部分では既習の図形の面積の求め方を想起させる。これらが円の面積の求め方を考えさせる時に必要となるため、丁寧におさえさせる。その後、円の面積をどのように求めればよいか自由に考えさせ、その考えをノートにまとめさせる。この時、支援が必要な児童にはあらかじめ教師が用意しておいたいくつかの課題解決の方法から1つを選ばせる。学習のゴールは1つであるが、そのゴールに至るまでのルートは1つではない。したがって、学習課題の解決方法を児童自身に選択させる。教師に決められたことを児童が決められた通りにするのではなく、自分で決めて実行することが自己決定であり、学習課題の解決方法を児童自身に選択させることで、児童に自己決定の場を与える。この時、次時で同じ解決方法を選んだもの同士でグループ活動を行うことを告げ、自分勝手な自己決定ではなく、「自分」と「相手」の両者を中心にして行動させる。

【第2時】課題解決の方法が同じ児童で4人1組程度のグループをつくらせ、グループで話し合いを進めながら課題解決にむかわせる。今回グループを4人1組にした理由は、人数が多いとどうしても話し合いに参加しない、あるいはできない児童が出てくるためである。さらに4人それぞれに①発言（自分の考えを話す）、②書記（①の発言をホワイトボードにまとめる）、③タイムキーパー（時間を計る）、④お助け（①が発言に困った場合手助けをする）、といった役割を与え、時間でローテーションをさせていく。そうすることで1人1人が発言の場をもち、自己存在感を得ること

ができる。

【第3時】グループごとに円の面積の求め方の考えを発表させる。この時、評価カードを用意しておき、発表の後に「他のグループが工夫していたところを書きましょう」などと、相互評価をさせる。ここでの評価方法は、減点法ではなく加点法を採用する。そうすることにより、児童が互いの良さを見つけ合い、それを認め合うことができる。このような取り組みを行うことにより、児童同士に共感的人間関係を築かせることができる。

#### 5. 「算数科」と「自己の生き方について考える力」についての考察

不登校児童の対応の1つとして、本節では不登校未然防止につながる単元指導計画のあり方について考えた。「学業の不振」を理由に不登校となる児童が多い中で、教師が授業内容の充実や指導方法の工夫改善について不断の努力を行うことは必要不可欠である。そのため、児童が「学びの楽しさ」を実感できるように、「生徒指導の3機能」である自己存在感、共感的人間関係、自己決定の場を授業に取り入れた算数の単元指導計画を作成してきた。

それに伴い残された課題は、授業実践の問題である。今回の研究では、改善指導案をもとにした授業実践を行うことができていない。そのため今後の課題として、学校現場で今回の「生徒指導の3機能」を取り入れた不登校未然防止につながる授業を実践し、実証研究を深めていきたい。

#### IV. 研究成果と今後の課題

本稿では、未来を築く子供たちに生き抜く力を育む人間教育をめざして、「特別の教科道徳」における「夢や希望を育む」指導と「算数科」を軸にした「学力不振による不登校の未然防止」の指導を検討してきた。

具体的に指導案の改善例を提示することで、方向性は示すことができたと考える。「特別の教科道徳」の中で、自己の生き方を考える時間の保障

をすることや算数科指導の中に、生徒指導の3機能を生かした指導の改善などの視点を明確にしたことを成果として研究の緒に就くことができた。

言うまでもなく、教育課程において、各教科等において何を教えるかという内容は重要である。これまで以上に、その内容を学ぶことを通じて「何ができるようになるか」を意識した指導が求められている。指導の目的が「何を知っているか」にとどまることなく、生き抜く力を育てるために「何ができるようになるか」にまで発展していくための研究はますます必要となるであろう。

今後も、「人間教育」という視座から、学習者の側に立った指導者としての確固たる理念とたゆまない実践研究を深めていきたい。

#### 【引用文献】

- (1) 中央教育審議会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」(平成28年8月26日)
- (2) 文部科学省HP「現代の子どもの成長と徳育をめぐる今日的課題」(平成21年)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286155.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286155.htm)
- (3) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編(第2章 道徳教育の目標 第1節 道徳教育と道徳科)」P.5(平成27年)
- (4) 文部科学省HP「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査-用語の解説」(平成22年4月)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/shidou/yougo/1267642.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/shidou/yougo/1267642.htm)
- (5) 文部科学省HP「不登校への対応の在り方について」(平成21年)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/shidou/yougo/1267642.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/shidou/yougo/1267642.htm)



- (6) 文部科学省提出資料「日本の子供たちの自己肯定感が低い現状について（資料4）」（平成28年10月28日）
- (7) 洲脇史朗・宮地功「算数が好きになる要因から見た日本の小学校算数教育への提言－第3回国際数学科教育調査を用いて－」P.3（平成12年9月26日）
- (8) 古荘純一『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』光文社新書（2009）
- (9) 中馬好行・霧川正幸「不登校や問題行動の未然防止につながる学校づくりの実際」P.231（2015年3月）
- (10) 文部科学省「生徒指導提要（第1章 第2節 2 学習指導における生徒指導）」P.6（平成22年3月）
- (11) 東京都教職員研修センター「自尊感情や自己肯定感に関する研究」（平成25年2月）

#### 【参考文献】

- 1) 柳沼良太・竹井秀文「アクティブ・ラーニングに対応した道徳授業 ～多様で効果的な道徳指導法～」（平成28年）
- 2) 貝塚茂・関根明伸「道徳教育を学ぶための重要100項目100」（平成28年）
- 3) 岩手県立総合教育センター「生徒指導の機能を生かした授業づくりの手引き」